京都帝國大學新聞
昭和十三年六月二十日（月曜日）　京都帝國大學新聞社　第二百八十一號（一）
月二回四日発行

創立記念日を迎ふ

四十一年の感激新たに

嚴肅事變下の式典

就職戰線俄然緊張

續々申込み殺到す

早くも色めく法・經學部

昨年度の總決算終る

活況を呈した就職率！

法60パーセント
經70パーセント

肅學一周年！

"當初の信念に變りなし"

濱田さん感慨の日

事變下の農村へ

今夏奈良縣下の農家に分宿して

農學部生の實地研究

綜合學術研究に

本部總會第八日設

學の内外

日曜日は何故休みか

山本杜子郎

學會

七、八月の新聞

三四郎

夏目漱石著

運命

幸田露伴著

みみずのたはこと（下）

徳冨蘆花著

阿部一族

森鷗外作

三人吉三廓初買

黙阿彌作

垂加翁神説 垂加神道初重傳

村岡典嗣訂

南總里見八犬傳（四）

曲亭馬琴作
小池藤五郎訂

三美本 金葉和歌集

松田武夫訂

昭憲皇太后御集 全

宮内省藏版

明治天皇御集 全

宮内省藏版

文藝批評論

矢本貞幹譯

ハイネ新詩集

番匠谷英一譯

憂愁夫人

相良守峯譯

街の子

シュオッブ作

三銃士（二）

デュマ作
生島遼一譯

哲學の根本問題

インメル著

マクベス

野上豐一郎譯

農業保護政策批判

リカルド著
大川一司譯

死の家の記録

ドストエフスキー作
中村白葉譯

菊畑の葡萄作り

岸田國士譯

脂肪の塊

モーパッサン作
水野亮譯

零落者の群

ゴーリキイ作
上田進譯

多物語

ヘッセ作
井汲越次譯

狂へる花

ケラー作
一條昌譯

限りなきいのち

ハイルプロンのトーマス
手塚富雄譯

愉しき放浪兒

アイヒェンドルフ作
關泰祐譯

暗夜行路

志賀直哉著

文庫總目錄

岩波書店
東京市神田區一ツ橋二ノ三
電話小石川（88）一〇〇一番
振替東京一六〇九八番

普遍主義的國家論の一型相

▼……特に國家の全體性の問題

吉富重夫

（一）

（二）

（三）

經濟時評 7

變革期の經濟學

―學は實踐的立場の次年―

柴田敬

說源起界生物無

―の再檢討 生物發生論議

石原辰郎

下りない幕

「級方教室」のこと

石川貞純

學園時報

スペイン

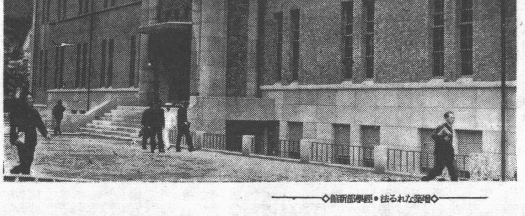
内亂二年 北川正夫

祝成落築新

施工 株式會社 松村組

本社 大阪市東區大手通一丁目二十六番地 電話 東 七七一一番
支店 東京市麹町區内幸町一丁目一番地 電話 銀座 代 六六六六番

營業所 京都市左京區聖護院山王町 電話上一三〇番
同 小倉市竪町四十一番地 電話一五七五番
同 名古屋市東區朝日町一丁目五番地 電話東七五四三番
同 新京中央通十九番地 電話三九五二番



◇創新部學經・法・經濟・新館（建築方）職工方◇

大工方 田原忠吉 京都市下京區東九條中殿田町九 電話七〇五三〇番
スチールシヤッター 田中製作所大阪支店 大阪市北區絹笠町九大江ビル内 電話北(36)八三三番
木製建具職 築紫宗治郎商店 京都市中京區富小路二條上ル 電話上(34)三一〇四番
土工、左官職 能登與組 京都市下京區高倉通五條下ル堀町一九 電話下(6)二八五五番
砂利、砂 杉江畝次郎商店京都出張所 毅一 京都市左京區岡崎西天王町七五 電話上(3)二三〇番
スチールサッシュ・スチールドアー 株會資 山本窯業商店 大阪市北區梅田町六五番地 電話北三〇九一番
タイル、テラコッタ 窪島プレス工業所 大阪市旭區赤川町五二八番地 電話川口一五二番
左官職 前田岩吉 京都市上京區衣棚町丸太町上ル 電話上(3)二八四番
ペンキ塗裝 松木好太郎 京都市上京區室町通上御靈前上ル竹屋町 電話上(3)七九六番
タイル貼職 鈴木參次 京都市左京區吉田上阿達町 電話上(3)七九六番

就職 受驗 用のお寫眞は 京都御所西 オカモト 電話二七四二

小山齒科醫院 京都帝國大學醫學部講師 小山正光 京都市中京區西洞院通高辻南入 電話上五二八五番

長谷日進堂 東京銀座通二丁目 電話上二九五番

靴見本陳列 靴修理 三高出張所ニテ 村上靴店 京都市上京區小路北 電話上(3)三一八番

新案・調劑・醫科用品 東山藥局 熊野神社停留所前 電話上三一四〇番

耳鼻咽喉科 醫學博士 安野吉郎 京都市高倉通三條北 電話本局六一六二番

懐しき朴歯の音！
高専大會二旬に迫る
大谷射場につるべ打つ射撃戦をトップに

灼熱下に展開する若人の意気と力の白熱戦、恒例の高専大會は七月十三日の射撃大會をトップに開催されるが、本稿し切まで に内定したスケジュールはおよそ左の如し

▼庭球部　京都リーグ　七月十日
▼同部　京都リーグ　七月十一日―十二日
▼同部　太秦コート　七月十六日―十八日
▼同部　七月十九日―二十日
▼同部　七月二十一日―二十二日
▼水泳部　中書島　七月二十三日―二十四日
▼射撃部　大谷射場　七月二十五日―二十六日
▼同部　七月二十七日―二十八日
▼庭球部　大谷射場　七月二十九日―三十日
▼同部　七月三十一日―八月一日
▼陸上部　大谷射場　七月二十三日
▼同部　七月二十四日―二十五日
▼水泳部　中書島　七月二十六日
▼本大會最終日　七月二十日

▼庭球・陸上・水泳・射撃の各部は各リーグ戦に於ける成績を勘案して決勝戦に出場する選手を選出する

月曜講座　文化類型學の概念

高山岩男

第二回文化の諸類型（その二）

二、印度文化

[illegible]

第二回　キリスト教と佛教

一、キリスト教の特殊性

[illegible]

二、佛教の特殊性

[illegible]

三、キリスト教の神話性と佛教の哲學的性格

[illegible]

四、救世主としてのキリストと聖者としての佛陀

[illegible]

五、原罪と解脱、信仰と悟

[illegible]

生の悲歌

――だが青春の文化 をと――

芳賀檀

[illegible]

呼吸器病科
京都保養院
院長　富田精

「英語研究」編輯部編
CURRENT ENGLISH PAMPHLET
理想的教養教材・現下海外事情時局入門雑誌 ご愛読者大募集
No. 2
How America Treats the Negro. (By Elmer Carter) England through Egyptian Eyes. M. Nagib) Hitler, The Man. (By F. Yeats-Brown) Japan Looks South. (From The Round Table) Charles A. Lindbergh. (By Sisley Huddleston) André Gide
社究研

The Study of English
時文研究・世界文化展望
清新七月號
★（銀二料込）銀十五價定（九・二金釘等十字・七・五金釘等ケー）

英語研究
清新七月號
時文研究・世界文化展望
★（銀二料込）銀十五價定（九・二金釘等十字・七・五金釘等ケー）

理想　七月號（第八十六號）　定價五十錢　送料一錢五厘
イタリーの文化と思想
理想社

最新刊
杉村廣藏著　四六判　四百頁　定價一圓五十錢
經濟哲學通論
社會思想社

白井直眼鏡店
京都帝大病院正門前　電話上㊀二二七九・下㊀三〇七〇
印國光レンズ發賣元

一ヶ月――一枚――一〇錢
クリステル（ドイツ製鮮明又〇・二三綿）
京都市内各眼鏡店にあり

ルービヒサア特製
ルービンオニ
上田寫眞器店
京都市上京區寺町通丸太町上ル
大日本寫眞株式會社

帝國大學醫院眼科
府立醫科大學眼科御指定
赤十字社京都支部醫院眼科
眼鏡
吉川眼鏡店
本店　京都市大宮通丸太町上ル　電話上㊀二〇一番
支店　京都市寺町通丸太町上ル　電話上㊀二〇一番
眼鏡專門　正確廉價

初夏の名作陣
ネマネ倶樂部
三錢（共）

舞踏ギャラプレヴュ
（第一回大試驗舞會）
廿五日（土）　廿六日（日）二回開催
廿七日（月）
今秋十月發賣豫定（一般公開）
名匠ジュリアン・マスイヴィル・エ監督
ジュヴィル・ベル主演
映畫ルネサンス

帖手の
を確立する百本に優るこの一本
人は青春の如何を問はず感激の涙を贈る！
洋書が輸入されても百本に一本あるかないかの珍品！香高いロマネスクの華！
冷房完備　松竹座

夏休み短縮案再燃

學生生徒主事會議開く

十六日、朝から文部省で學生生徒主事會議が開かれ、學生の夏休み短縮問題について協議した。この問題は昨年の第二回主事會議にも提出されたが、その時は學生の健康上の理由から反對が多かつたので、今回は更に慎重な調査研究を遂げた上で提出されたものであり、ブランダとして提出するものではないが、主事の間に相當な意見の相違があるので、その調整に多少の時間を要するものと見られてゐる。

今度は學生の聲を！

學生福利施設調査施行

【東京】厚生省では學生の體位向上の見地から學生の福利施設に關して、その實情を調査することとなり、目下その調査項目を作成中であるが、その調査項目は學生の體位向上に關する一般的事項、學生の保健に關する事項、學生の體育に關する事項、學生の娯樂に關する事項、學生の修養に關する事項、學生の生活に關する事項、學生の經濟に關する事項、學生の就職に關する事項、その他學生の福利施設に關する事項等である。

物價の上値打ち診

多難の同志社總長

牧野氏に正式決定

"學生よ誇を持て"と語る

河合教授の公開講演

社會科學古典研究會主催

法學を學ぶ人へ

後藤清

文化部の動き

文化擁護の叫び

辯論部講讀會盛況

文學論花開く

歷巡館書圖

文化科學

成城文化史

英語劇大會

能樂鑑賞會

安田銀行出町支店

夏の洋服

丸美屋洋服店

獨逸へ!!

金鳥の渦巻

飛んだ月曜

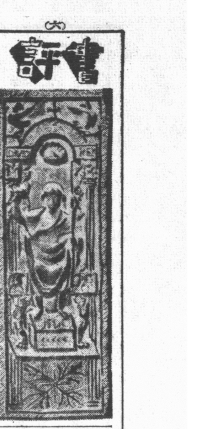
呪はれた六月五日

社會の音

内藤湖南「支那論」

古典の時代的意義

嘉治隆一



いわゆる「支那論」の古典的価値を論ずるに当たり、まず第一に問題となるのは、それが書かれた時代の支那の現実に対して、どれだけの正しい認識を与えたかということであろう。

「支那論」は大正三年に書かれたものであるが、それ以前の支那の現実に対する認識は、どのようなものであったか。

「支那論」の冒頭に、「支那の現状を観察するに、第一は革命が無かった三年間、第二は革命が始まった三年間、第三は革命が終った三年間、即ち大正三年までの九年間を以て、支那の現状を観察するに最も適当な時期と思う」とあるように、内藤湖南は辛亥革命を中心として、それ以前の九年間と、それ以後の九年間とを、支那の現実を観察するに最も適当な時期と考えている。

辛亥革命以前の九年間は、支那の現実に対する認識が、支那人自身においても、日本人においても、最も誤っていた時期であった。

支那人自身は、日清戦争の敗北以来、支那の現状に対する不満から、改革の必要を痛感し、改革の実行に着手していた。

日本人は、支那の現状に対する不満から、支那人自身が改革の必要を痛感し、改革の実行に着手しているのを見て、支那の現状に対する認識を誤り、支那の改革の実行を過大に評価していた。

内藤湖南は、支那の現状に対する不満から、改革の必要を痛感し、改革の実行に着手しているのを見て、支那の現状に対する認識を誤り、支那の改革の実行を過大に評価していた支那人自身と日本人とを、ともに批判しているのである